

「イエス、偽善を問う」（ルカによる福音書十一章三七〜四四節）

## 1 イエスとファリサイ派

今日の聖書箇所、単独でよく取り上げられる箇所とは、必ずしも言えないところですが。一つの福音書をつづけて読んでいく中で出会い、立ち止まる、そうした箇所の一つです。

しかし立ち止まらされるということ、それはすでに一つの恵みなのではないでしょうか。読み飛ばされがちな御言葉によく聞くように、よく学ぶように、聖霊によって導かれていると思うからです。

今日の最初のところに、イエスがあるファリサイ派の人から食事の招待を受け、「その家に」入って行ったことが書いてあります。少し先、次の段落、五二節には、イエスがその家を出て行ったことが書いてあります。今日の話は、その一人のファリサイ派の人の家でのこと、食卓でのことです。一回で済ませたいのですが、長いので二回に分けて取り上げることにします。

ところでファリサイ派について、少しおさらいをしておいたほうがいいかも知れません。

ファリサイ派というのは、ユダヤ教の一派です。対抗勢力としてサドカイ派というのがありましたが、サドカイ派が、神殿を中心として、祭司と結びついていたのに対して、ファリサイ派は、神の言葉としての律法、掟を重んじ、その順守を生命として成立した党派です。

彼らは律法を生活のすみずみまで適用させようとしてきました。そのため律法研究にも励み、場合によっては新しい規則もつくったりしたのです。そしてそれを厳格に守ることを自らに課しただけでなく、人々にも求めたのです。各地の会堂の組織を通して、一般民衆の間に大きな影響を与えていました。律法学者というのも、多くはファリサイ派でした。

律法を守るための規則、施行細則のようなものもつくったと申しました（「昔の人の言い伝え」と言われているもの）。今日の箇所で問題になっている、食事の前に手を洗う、というのも、じつはこの言い伝えの一つです。それも、律法と同じ権威をもつものとして順守が要求されていたのです。

これだけの律法へのこだわり、それ自身は、賞賛に値するものかも知れません。そういう意味では立派なのですが、ご承知のように、イエス・キリストを、目の敵として、ことごとく対立し、最後は、ユダヤの宗教と政治を支配していた人たち、祭司や長老たち、あるいはヘロデ党の者たちと一緒にあって、ローマ総督ピラトに訴え出て十字架につけたのです。

このイエスとファリサイ派の対立は、すでに私ども、これまで何回も見てきたところです。ガリラヤ時代、イエスが宣教に立たれたときから、ファリサイ派がつきまとい、命を狙っていたことを、私ども知っています（五・一七他）。

振り返ってみれば、ファリサイ派の人々が、イエスとその弟子たちに関して問題に

したことはいつも同じで、あの連中は「決まっていること」を尊重していない、守っていない、というものでした。

たくさん例がありますが、例えば、安息日に、イエスがいやしを行って、とがめられたことがあります(六・六以下)。この場合「決まっていること」は、安息日には仕事をしない、礼拝以外のことを人はしないということでした。いやし、一和助けることも、人間はまさに人間が何もしない日、ですから、いやしも、人を助けることも、場合によったら、何か「する」ことには違いないのであって、安息日にはいけないということに入るのであります。

しかしそれは、あまりに非人間的なことではないでしょうか。そして神様の本質からして、憐れみの神の本質からして、そのように神がお考えになることはないはずで、神の憐れみの実現を、人間の決めたことが邪魔している、ということにならざるをえないのです。

イエスにとつて、決められたことにとつとることが、最も重要なことではなくて、神の御心に一致することが問題なのでした。それゆえ神の根本的な思いを問い、それに従うことが大事だったのであります。

こうして考えると、ファリサイ派の人とイエスはまったく別のところを見ていたように思われます。それゆえその対立は、厳しいものになります。互いに攻撃的に見えるようなところも出て来ます。

## 2 偽善

実際イエスのファリサイ批判を伝えている箇所、今日の箇所ほど、厳しいところはありません。そのきっかけは、食事に招待されたイエスが、食事の前に手を洗わなかったことでした。

イエスはこのように話しておられたとき、ファリサイ派の人から食事の招待を受けたので、その家に入って食事の席に着かれた。ところがその人は、イエスが食事の前にまず身を清められなかったのを見て、不審に思った(三七〜三八節)。

ところで、イエスがファリサイ派の人から招待を受けるのは、ルカによる福音書では、今回がはじめてではありません。二度目です。前回は、ファリサイ派のシモンという人に招かれています(七・三六以下)。

ファリサイ派の人からの招待、それは一方で、彼らがイエスに対しても開かれていたことを示しています。しかし他方、いつもどこかに緊張をはらんでいて、一つの「試み」も意味していたのです。

早速問題になったのは、イエスが食事の前に手を洗わなかったことでした。いうまでもなく、これは、衛生上の問題ではありません。「身を清めなかった」という問題です。汚れ・清めという宗教上の問題です。

この場面の記事が、マタイ(一五・一〜二〇)とマルコ(七・一〜二三)にもあって、比べてみると、違いがあります。

ルカでは、イエスご自身が手を洗わなかったことで、「不審に」思われたわけですが、マタイとマルコでは、イエスの弟子たちが手を洗わなかったことで、ファリサイ派の人がイエスを問い詰めようとしています。

このマタイとマルコでも、詳しく見ると違いがあり、マタイでは弟子たちみんなが家のように手を洗っていないかったようにも見えます。マルコでは、手を洗っていないかったのはその一部であつたと、はっきり書かれています。マタイとマルコで、イエスはどうかといえ、イエスは、これはルカも同じ（九・一六）、食前には、祈りをささげていました。

いずれにせよ弟子の中に、師イエスと同じく手を洗わない者だけではなく、清めの言い伝えに従って手を洗っていた者もいたのです。そしてイエスはそれをとがめていなかった。少なくとも洗っている者に、それを止めさせることはなさらなかった。何よりそこにファリサイ派との違いがあります。イエスは「言い伝え」にもとづいて手を洗っている者も許容し、ファリサイ派の人々は、洗わない人の存在を少しも認めようとしなかったのです。

イエスにとって、食前に手を洗う、清めることは「人間の言い伝え」（マルコ七・八）にすぎなかったのに対して、ファリサイ派にとって、人間の決めたものが、あらゆるものの物差しであり、それに合わないものは排除されるべきものなのです。異質なものをファリサイ派は許さない。しかしイエスには、むしろそうした人間の言い伝えが、私ども一人ひとりの、神に従う純粋な思いを、妨げることがあつてはならなかったのです。そこに、イエスとファリサイ派、その違いが、すでに現れたことを知っておきたいと思えます。

### 3 内も外も神の支配のもとに

イエスが食前に手を洗わなかったのを見て、イエスを招待した、「ファリサイ派の人」は「不審に思った」とありました。「不審に思った」とは「不思議に思った」（口語訳）、「驚いた」（聖書協会共同訳）ということですが、この言葉からすると、この人は、イエスを試みよう、陥れようとして招いたのではなかったように見えます。ともかく驚いたのです。

それにも関わらず、イエスの反応は、厳しいものでした。この彼に向かって、まるで彼がファリサイを代表する者であるかのように、「あなたたちファリサイ派の人々は・・・」と言ひ出したからです。

主は言われた。「実に、あなたたちファリサイ派の人々は、杯や皿の外側はきれいにしているが、自分の内側は強欲と悪意に満ちている。愚かな者たち、外側を造らせた神は、内側もお造りになつたではないか。ただ、器の中にあるものを人に施せ。そうすれば、あなたたちはすべてのものが清くなる」（三九〜四一節）。

ここから、今日の箇所（四四節）まで、イエスの厳しい言葉がつづいていきます。相手に息もつかせず、いくつものことが、語られます。こういうイエスは、ち

よつと例がないほどです。

イエスがここでファリサイ派の人々に向けて語った厳しい言葉の数々、全部を見ることはできません。

取り上げるのは最初の数節ですが、しかし全体は、一二章一節の言葉を借りて、ひと言でいえば、「ファリサイ派の人々のパン種、それは偽善だ」という言葉に尽きるように思います。偽善とは、いうまでもなく、うわべだけをよそおい、正しい人、善い人のように見せかけることです。

その厳しい指摘が、いまお読みした最初のところ（三九〜四一節）でなされているように思います。

ここに出ている、「杯」、「皿」、「器」、いずれも人間を指しているのだと思います。確かに人間は、神に造られた土の器です。

器に外側と内側があるように、人間にも外側と内側があります。外側は、他人に見えるところ、他人に見せる顔です。内側は自分だけが知っているところ、自分しか知らないと思っているところ、しかし神にいつも知られているところ、それが人の内側です。

いまイエスは、イエスを不審の目で見てこの人に、彼の心の中を推し量って語りかけるのです。

不審の目で見ているあなたは、うわべだけで、人を判断している。手を洗う人は清い、洗わない人は清くないと。

しかし本当にそうであろうか。手を洗って清くなったとしても、それは、ただ目に見える、ただ外側だけのことではないだろうか。目に見えない、人の内側、心は、どうなっているだろうか。

そこまで見なければ、清いか、清くないか、分からない。もしかしたら、あなたの心も、強欲と悪意に支配されているのではないか。それでも、自分は清いと言えるかどうか。もし、手はともかく洗ったから清いと言い張るなら、それこそ、欺瞞と言わざるをえないのではないだろうか。私は手を洗っていない。しかし、それは、私が清くない証拠ではない。私の心は、一心に神に向けられている、外も内もない、そこに純粋さ、清さがあり、それは、ただ神だけが知っておられることです。それゆえ手を洗う・洗わないという目に見える基準で、人間的な基準で、人を判断することをしてはならない。

さらにイエスは言葉を次いで言います。「器の中にあるものを人に施せ」。少し分りにくい言葉です。直訳は、内にあるものを施せ、です。新しい翻訳のように、「できることを施しとして与えなさい」（聖書協会共同訳）と理解しておきます。追求されるべきものは、偽善ではなく、真実の生き方です。偽善は、うわべだけで、ごまかす。その反対の真実の生き方は、内と外、外と内、その全体をもって、単純に、純粋に神の言葉に従うことです。

そしてその場合前提になっているのは、私どもの外側も内側も、神がお造りになったということです。そして、私どもの生、体も心も、私どもを取り囲む世界も、神のご支配のもとにないものはないのです。このことを真剣に受けとめることから、人間の真実の歩みは生まれるように思います。

（二二月一二日）